

## 書 評

### 広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険： 子どもに学ぶことばの秘密』

(岩波科学ライブラリー、2017年)

松浦年男

#### 1. はじめに

本書は2017年3月に刊行以来、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』などといった全国紙や、『日経サイエンス』『週刊新潮』『サンデー毎日』などといった一般雑誌にも取り上げられ、さらに著者の広瀬氏も『VERY』（主婦向けファッション雑誌で、「シロガネーゼ」などの流行語を生みだした）のインタビューに登場するなど、一般書としての普及度は高いものとなっている。その結果、順調に版を重ね2017年9月21日時点で6刷まで行き、同日のアマゾンランキングでも「科学読み物」で5位<sup>1</sup>になっており、言語学という分野に限らずとも順調な売れ行きを見せていると言えるだろう。

告白すると、この書評の依頼を受けたとき、いくつかの理由で引き受けるか躊躇したところがあった。ひとつに本書は一般向けに書かれたものであって、その書評を専門家向けの雑誌に書くにもどのように書けばいいかあまり見当つかないところがあった。一般向けに書かれたものはやはり対象が一般向けなのだから、専門的な観点からすると「甘め」に書かれるところが出るのはしょうがない。そこに重箱の隅をつつくような書評を書くというのも気が引けるし、そもそも無粋だろう<sup>2</sup>。さらに、私は著者の広瀬氏以上に言語獲得研究には縁遠く、大学院時代の仲間が言語獲得の論文を書いていたことぐらいしか繋がりが無い。せいぜいほかの言語学者と同じように、自分の子供の言葉について記録を取ったりするぐらいである。そのような私が言語獲得の場面を手がかりにした本書の書評を書くというのはお門違いではないかという思いがある。最後に、これが一番大きいかもしれないのだが、正直なところ同書に対しては恥ずかしながら研究者として嫉妬しているという気持ちがあり、それを隠しきれないところがどうしても出てしまうのだ。

数年前に私は博士論文をもとにした単著を公刊したのだが、そのあたりから中期的な研究上の目標のひとつに「今までにないアプローチの入門書を書く」ということがあった。もっとも入門書を書くにも現任校での私の担当科目は全て初年次向け日本語文章表現に関わるもので、ゼミ生はおろか専門科目はひとつも持っていない。自分で使う場面の無い入門書を書くというのなかなか

<sup>1</sup> ちなみに1位は科研費書類の書き方に関するものだった。

<sup>2</sup> もちろん一般書でもそこに大きな誤りがあったとき、それを指摘することには価値があると思う。

なか力の入らないことで、自然とそのための作業は進まずにいた。そんな中で子供の言葉（大人から見た「誤り」）に対して言語学的な解説を加えるというまさに今までどうしてなかったのか、というアプローチで書かれた本書が公刊され、私は正直なところ「やられた！」という気持ちに先に立ってしまった。広瀬氏は本書の中で自分の子供（K太郎くん）の言葉をSNSで記録していると書いているが、私自身も自分の子供らの言葉についてはSNSで記録を取っており、論文としては書けないだろうけどエッセイ的な書き物として、コミケなどで頒布されている同人誌（SJLL: Semi-annual Journal of Language and Linguistics）に書こうかなと思っていたのだった。しかし、本書が出たいま、そのような書き物をして「二番煎じ」の感がぬぐえないではないか。もちろん「もっと面白いもの」にすれば解決できるのだが、本書に目を通したことのある方なら分かるだろうが、これを超える面白さの本を書くのは非常に難しい<sup>3</sup>。

このように、この書評は非常に難しい、微妙な、そしてやや恥ずかしい立ち位置から書かれたものだということをご理解いただきたい。

## 2. 本書の内容と特徴

本書は以下の7章から構成されている。

- 第1章 字を知らないからわかること
- 第2章 「みんな」は何文字？
- 第3章 「これ食べたら死ぬ？」－子どもは一般化の名人
- 第4章 ジブンデ！ミツケル！
- 第5章 ことばの意味をつきとめる
- 第6章 子どもには通用しないのだ
- 第7章 ことばについて考える力

著者は「体系的な解説」や「概説的な解説」を意図せずに書いたが、結果として言語学の主だった分野をカバーしたものとなっている。主な内容と取り上げられた題材を簡単に紹介しよう。まず、第1章は文字と音の対応関係から、清濁、四つ仮名といった単音レベルの音声・音韻に関する問題に言及している。第2章は文字と音声の対応関係や音位転換などの例をもとに、日本語のリズムの問題を取り上げている。第3章は活用形の話を中心とした形態変化の話題になっている。第4章は第3章の活用形の問題や、語の使い方などの例をもとに否定証拠、過剰一般化の話題を扱っている。第5章はある語が何を指しているかという指示の問題を通じて、語彙レベルの意味論（意味範囲）について解説している。第6章はさらに大きな文単位の意味を扱っており、会話の公理、数量詞の解釈、心の理論などが登場する。最後の第7章はメタ言語知識についての説明となっている。

このように本書は広い範囲の言語現象を扱っているが、そこで貫かれている精神は一貫してい

<sup>3</sup> ちなみに音声学に関する「今までにないアプローチで書かれた入門書」としては同じ岩波科学ライブラリーにある川原繁人『音とことばのふしぎな世界－メイド声から英語の達人まで』がある。

る。それは、言語が規則の体系であり、子供は試行錯誤をくりかえしてこの規則を身につけているということである。もちろん全てが規則というわけではなく、語彙的な原因に帰するものもある。大切なことは、子供が基本的に規則を適用して（大人から見れば）誤った形を用い、試行錯誤していく中で自分の力で母語の体系を身につけているということである。

本書が言語獲得を専門としていない言語研究者にとって嬉しいのは巻末のブックガイドが充実していることである。各章で議論されている事例を中心に何を読めばその事例が載っているかを参考文献をもとに知ることができ、さらに言語獲得一般について知りたい人のためのブックガイドも備わっている。公刊時点で漏れてしまった参考文献の一部も、著者が公開している専用サイトにアクセスすることで知ることができる。この特設サイトは、本書のメインのガイド役であるK太郎くんのその後の「活躍」を知ることができるという点でもありがたい。

### 3. 学問と社会のつながり

次に、言わば本書の「外」に目を向けてみよう。本書は内容もさることながら、社会との繋がりとという点も無視することはできない。そのひとつの例がTwitterでの投稿だろう。Twitterなどではある特定の話題について投稿するときに、ハッシュタグと呼ばれる#に続けて話題の見出しをつけるという仕組みがある。これをつけることにより、同じ話題の投稿を検索することが容易になる。本書の増刷にあわせ、4月30日より著者がこのハッシュタグを使った投稿を積極的に始めた。そして、それに付いていったかのように、言語研究者だけでなく本書を読んだ一般人からもハッシュタグを用いた投稿が続き、9月20日時点でその数は183件（評者による集計）にまでなった。

それらの投稿を見ていると、子供のちょっと不思議な言葉使い（冒険）の様子を書いているものの他に、読者が読者なりの分析を施したものもある。これは、前節でも述べたように子供の言葉が何らかの体系に基づいている、言い換えると、子供の言葉を観察するときに、それがデタラメなものではなく、体系を持ったものだという視点が貫かれているからこそできるものである。このように、一般人も巻き込んだ形で本書の「冒険」は続いているのだが、見方を変えると、これは本の刊行とその後のアクション（特設サイトの開設、ツイッターでの投稿）を通じて社会と学問の世界を繋いでいるともいえる。言い換えると、ひとつのサイエンス・コミュニケーションのスタイルとも見ることができよう。文系、さらには大学不要論が叫ばれる昨今において、文系<sup>4</sup>に分類されることの多い言語学においてここまで社会とのつながりを持たせることができる本は稀であろう。そのような点においても本書の果たした社会的な役割は無視できない。

### 4. 贅沢なリクエスト

本書は大人から見ると「間違い」に見える様々な子供の発話を取り上げて、それが子供の「規則」からみてどう分析されているのかを示している。つまり、子供は子供の規則（文法）に基づいて話していて、それが多くの経験、試行錯誤によって大人の規則へと変化していく。このような側面が言語獲得にとって非常に重要なものであることは言を俟たない。ただ、その一方で、子

<sup>4</sup> 評者自身はこのような文系・理系といった分類は不毛なものだと考えている。

供の言語の中にはちいさい頃から大人と変わらない側面もある。定延（2005）によって挙げられた例を簡略化して示そう。例えば、家の中でバタバタ走り回って遊んでいる子供に「うるさい！家の中では静かにしなさい」と叱ったとき、子供はだいたい「はい」と返事をするが、このとき「はい」をアメリカ人が挨拶をするときのように下降調で発話する子供はまずいないだろう。また、足し算や引き算を習いたての子供に対して「 $192 + 72$  は？」などと聞いたとき、暗算が得意でなければたいてい「えーと」というフィラーを付けるが、ここで同じフィラーである「あー」を付ける子供もまずいないだろう。「ちいさい言語学者」は一体どうやってこれらの表現を学び間違えずに育ってきたのだろうか。もちろん今取り上げた現象は「話し言葉」に特徴的なもので、本書が扱っている文法（規則）とは次元の違うものだと解釈されることもある。しかし、「子供たちが何を間違え、何を間違えないのか」を知ることは言語の研究として非常に重要なものとなるはずであり、やはり無視できないだろうと評者は考える。その意味で、こういった話し言葉に特徴的な現象について「冒険」した姿を探っていくことが、言語学と社会を繋ぐ上でもさらに大切ではないかと考える。

#### 参考文献

定延 利之（2005）『ささやく恋人，りきむレポーター：口の中の文化』岩波書店。

『ちいさい言語学者の冒険』特設サイト，<https://sites.google.com/view/yukihirose/> ちいさい言語学者の冒険（日本語を含む URL なので要注意）

広瀬友紀氏の Twitter アカウント <https://twitter.com/yukihirosetweet>